

# 農から考える心豊かな社会

農民詩人 星 寛治

働き方改革やオーガニック志向など、私たち自身の生き方や健康はどうあるべきかを考える機会が近年増えてきている。様々な情報が溢れ、技術革新が加速する中、心豊かに生きるとは何なのかを問い直したい。日本の有機農業の先駆者の一人であり、農業を通じて生命と向き合ってきた、農民詩人の星寛治さんにお話を伺った。

——有機農業が一般的ではなかった時代に、なぜ大変な苦勞をされてまで有機農業に取り組もうと思われたのでしょうか。

農業はその地域の自然環境の中で、生き物を生み出す仕事です。食べ物は生き物で人間の体を支えるものですから、安全で栄養価がたっぷり含まれていて、おいしくて、環境にやさしくて、農家もちゃんと自立して生きて

いけるような、そういう要素をしっかりと満たしていくものでなければいけないとずっと考えてきました。それは、政府が声高に唱えてきた効率優先の政策ではなくて、いかに生命や環境と一体となりながら、人間の一番大事な健康を支える本物の食べ物を生み出していくかというところに、本来の役割があるはずと考えるようになりました。しかしこれは個人の取り組みだけでは限界があります。そういう価値観に共感・共鳴する若者たちと一緒にあって、地域の中で孤立無援ではない多数派に少しでも近づく在り方であればいけないと一貫して考えてきました。ですから、地域づくりと一体のものだと思ってきました。農業の産業としての側面は無視することはできませんが、それ以上に、人間の命を支え、環境をしっかりと守っていくような営みとしての農業を探索していくということですね。それは当然、

環境と同じものでなければならぬ。企業的な大規模農業経営は近代的な技術を駆使しながら、環境にあまり配慮しないで専ら利益追求という方向に流れがちですが、それは人間の命を支える食べ物を生むための本来の営みからどんどん遠ざかっていくことなので、その原点を忘れないようなやり方であればいいけないと考えるようになりました。そのことが有機農業につながってきました。

そして一九七三年に二十代の若者を中心に、私は当時年頭で三十代の半ばでしたが、有機農業研究会を発足することができました。それが母体となりその後の高畠の地域づくりを牽引してきたところがあります。どちらかというと市町村・自治体の政策とは相容れないで、それと対峙するような農民運動になりがちなどころを、そうではなくて、行政もしっかり巻き込みながら一体となって地域づくり

を進めていくことを一貫となつて探求してきました。しかし一番大事なのはやはり食の安全ですね。

——有機農業研究会の他のメンバーはどのような経緯で有機農業を共に行うことになったのでしょうか。

有機農業には前の歴史があります。それは、青年団活動やサークル活動の中で絶えず学習を積んできたこと、そしてそのような自主的な活動を行政がしっかりと支援して、一体となつて学習環境づくりを行ってきたということです。ある日突然私がどんなに声高に言つても、そう簡単にじゃあ一緒にやってみようという雰囲気にはならなかったと思います。そのへんのところ非常に大事なところだと思います。

——学習というのはどのような学習だったのでしょうか。

例えば環境問題について、誘致した企業がその煤煙をまき散らすことによつて、住民の

健康障害を引き起こしていることに気付いた若者たちが、科学者と一緒になつて因果関係を突き止めて、公害の除去装置を作らせたことです。それだけではなく、結果的にその企業は数年後には町から出ていくことになりました。そういう自主的な活動が基本にあつて、行政が一定の理解をしながらそれを支援するという取り組みが有機農業研究会以前にありました。

あとは、若者たちが自分自身のこれからの人生を考える場合に、何が本当は大事なのかということを決えず喧々諤々と議論し続けてきました。二泊三日くらいの泊りがけで、湖畔荘という農業用水のダムの前にある宿屋で、徹夜で議論をしたようなことが一番のベースにありました。そのような積み上げが、自分たちが望むライフスタイルとか、地域社会を作っていくために全体としてどういうことが求められるのだろうかということに、だんだん議論が高まってきたことが有機農業につながってきました。そういう学習の蓄積があつて初めて具体的な有機農業というところにつながってきました。

もう一つ外の人からの働きかけとして、日

本の有機農業の父と言われる一楽照雄先生が何回も高島において、講演や座談会を行つて青年たちを啓発してくださつたことが非常に大きかったですね。あとは、有吉佐和子さんのような、いわゆる天才と言われる人が、『複合汚染』の取材においてになつて、何泊もしながら若者たちと議論を積み上げてきたというインパクトも非常に大きかったですね。その一人娘の玉青さんも、お母さんの跡をたどつてきて高島との関係を持つという流れが今でも続いています。

——今のお話を聞いてみると、必ずしも有機農業は一人でできるものではなかったと感じます。例えば高島以外の地域で、自分の望む農業の在り方と同じような考えを持っている人が地域におらず助け合える人がいない農家の場合だと、一人でそれをするのは難しいのでしょうか。

そういうことはありますね。私は今申し上げたようないわゆる生涯学習の活動をずっとやってきたので、四十歳の時から町の教育委員の社会教育分野から引つ張り出されました。

そして通算で二十五年ほど教育行政に関わってきて委員長も四期くらい務めました。そして私自身、行政の内側に関わり、企画立案の場面でも一定の役割を果たすことができたことも一つの要素としてあります。ですから、地べたを這う農民運動としての側面と、教育行政という公共的な空間の中で企画立案と政策としてそれを打ち出していくことが、合体系する形で地域全体の雰囲気が変わってきたと捉えています。

基本的になぜ教育なのかと申しますと、私は食べ物を生み出す農業も、人間を育てる教育も、地下茎のように見えない地下の部分でつながっていると思ってきました。ですから農業と教育はもともと一体のものだという信念があります。例えば、“culture”の語源も“耕す”ということに由来しています。文化のもともとの源流は、大地を耕すという営みなのです。それが今では、農業は土にまみれ泥にまみれてやる最も野暮臭い仕事だという雰囲気近代化以降作られてしまいました。しかしそれは大きな間違いであって、地下茎のように見えないところでしつかりつながっているというのが私の基本的な考え方です。

——農業体験のように生き物と触れ合うことは、子供や青年の教育上・発達上良いものと思いますが、そういうものを広めていくという運動はどの程度あるのでしょうか。

いわゆる田舎暮らしや田園志向と称される一つのブームのようなものが今盛り上がっています。耕す教育と勝手に名付けているのですが、例えば、春と秋の年に二回、町内の教育関係の先生方全員が集まる研究発表の場があります。そこで耕す教育ということを提案して、多くの先生方の共感をいただきました。それぞれの学校の現場で義務教育の九年間を通して、やがて幼児教育まで含まれてきますが、土に親しんで生き物を育てるといふ耕す教育を積み上げてきました。それが高島の一つの教育風土・伝統になってきています。耕すということに大いにこだわっています。

——食の安全性を保つために取り組むべきことについて、星さんのお考えをお聞かせください。

自分自身の生き方を通して食べ物はどういう意味を持っているのか、どういう要素で作られたものを私たちが体の中に取り込んでいくかという、極めて素朴で当たり前のことをもう一度考え直してみることが必要ではないか。ただ単にコマースや企業の戦略にまんと乗せられて踊らされるだけではなく、人生を通してどういう食べ物を食べ続けることが人生にどれくらい大事なかなのかを考え直すことです。このことが本当の意味での豊かさというものを実現できるポイントのところにあるわけですから。

——外食や買い食いを当たり前と思い、食の安全性について考える機会がないまま摂取する習慣がついてしまう子供も多くいると思います。親の働き方や家族の在り方と子供の食は密接に関わっており、意識を変えることは難しいと思いますが、どう考えますか。

社会的な状況としてはその通りだとは思いますが、そこで一つのポイントとして学校給食を見つめ直すことが挙げられます。地産地消とよく言われるようになりました。地場産



のもので、理想的に言えば食材も子供たち自身も関わって作った野菜や穀物あるいは加工品などを給食でいただくということは、非常に意味のあることだと思います。家庭においても、お母さんに、今日の給食はこういうメニューで大変おいしかったよ、お母さんもまた作ってくださいねと、いうふうにおねだりすることによって、その家庭の食の在り方が変わっていく一つのきっかけに給食はなりうると思います。高島町は義務教育だけではなくて幼児教育も地産地消、地場産の食材で作ることを基本にしています。学校農園で子供たち自身が汗水を流して作った野菜がその中に入っていれば、なおさら意味が大きくなってくるわけですね。

——高島町において、幼児教育から義務教育に至るまで地元のを子供たちが口にすることができるとは、どのような経緯で実現したのでしょうか。どこの自治体も行っていいわけではないと思いますが、高島町自体がそのような意識を持っていたのでしょうか。

それぞれの学校によっても異なりますが、学校の先生方だけではできませんので、PTAやあるいはおじさんおばさんの力も借りながら行われてきました。手作りの野菜や雑穀類、味噌などの加工品に至るまで、目に見える姿で作られたものを子供たち自身がおいしくいただくということは、地域や小学校区によって色合いが違いますが、非常に積極的に取り組まれてきました。二井宿小学校は山の麓の小さな小学校ですが、子供たちが作った野菜を給食の食材の五十%以上使うことを目標にして、それを実現しました。自分たちが一生懸命作った野菜がこの給食の中に半分以上も入っていると思えば、一層おいしく喜んで食べることができ、それが家庭の食生活にも波及するというつながりが出てきます。中学校においては、統合して一つの中学校になりましたが、そこでも三つの中学校時代に作った学校農園がありますので、そこを活用しながら自ら作るという営みを続けています。給食の食材全体に地場産のものを少しでも多く使うという基本的な考え方に取り組むということによって、随分と違ってくると思います。

——次に移住について伺いさせていただきます。まほろばの里に移住した若者も多いと著書の中で書かれていましたが、その経緯と最近の状況について教えてください。

一九九〇年の初め頃から高島共生塾というのを立ち上げて、その大きな事業の一環としてまほろばの里農学校を開設しました。大学生だけではなく都市の中堅市民に至るまで、あるいは定年退職後農村に移り住みたいと考えている方も含めて、都市住民に呼びかけて始めました。そして一九九〇年代の十年間にだいたい八十名くらいの方々が移住され、七十名くらいは定住されました。

ところが福島原発事故以来、風評被害もあり、その流れがピタツと止まってしまった。精密な分析のデータも絶えず取りながらそれを発信してきましたが、そういう情報だけではなかなかそういう大きな流れを食い止めることはできなくて、しばらくの間残念ながらその流れは止まっていました。しかしこれですべて諦めていいのかと思います、ただ単に情報を発信するだけではなくて、絶えず消費地に足を運びました。心ある人々に実情と状況を訴



えながら、是非またこちらに足を運んで実態をご覧下さいとお願ひして、徐々に人的な交流も復活してきました。まだ原発事故以前のところまでは百パーセントは戻りませんが、風評被害も含めて八割くらいまでは復活したのではないでしょうか。自分の感性というか、実感を持って体で捉えたもので判断していく取り組みでない、情報伝達だけでは乗り越えられなかったと思います。

八割くらいまで戻れば大いにまた新しい時代に向けて動き出したといえるわけです。それは私どもが絶えず消費地に足を運んで、産直提携という形で有機農産物をお届けしている方々を主体にしながらも、その絆を都市の中で横に広げていただく取り組みも併せて、なんとか少しずつ回復してきました。非常に面白い特徴として、二十代の若者たちが新しい価値観に目覚めたことがあります。例えば、高島町和田地区を中心として地域ぐるみで有機農業に取り組んできた上和田有機米生産組合があるのですが、そこに二十代の若者が十数名集まって青年部を作りました。自分たちの内部で話し合うだけではなく、絶えず都市の大学生や同じ世代の若者たち、場合によつ

ては世代を超えてそういう新しい価値に共鳴する人たちと話し合いを続けていくという積み上げが、若者たちの中にしっかりと根付いてきたんですね。最も大きな特徴は、物を作つて届けるという営みだけではなくて、作るということ自体に文化的な意味があるという、農の持つ文化性に若い世代が気付き始めてきたことです。例えば、立教大学と三十年以上のお付き合いがありますが、その学生食堂に高島米が一〇六〇キロ換算で年間二五〇俵くらい行っています。大変おいしいということ、一般の都民の方も学食に食べにおいでになるんです。そんなことで、都市の中でも横のつながりがある。つまり、もともとは学生自身の農業体験で、フィールドワークで高島にやってくる、米作りだけではなく野菜作りとか、いろんな体験を通してまた帰ってくるのですが、そのつながりの中で都市にまた一つの拠点が生まれて横に広がっていくというの、非常に面白い関係だと思つています。完全有機までいかななくても、いわゆる小

農薬・減農薬で比較的求めやすい価格でもつて届けられると、食べると圧倒的においしいもんですから、横に広がっていくんですね。

——そういつた横のつながり・広がりが、先ほどおっしゃっていた、若者が気付いた農の文化性なのでしょうか。

ええ、そうですね。若い農民たちも、例えば立教大学まで足を運んでその現場に触れるとか、様々な機会があるわけですから、学生がこちらにやってくるだけではなくて、相互交流が始まっていくんですね。生産者の側も消費の現場を見ることで、モチベーションになっていると思います。

——今の若い世代の農家の方は、消費の現場を見る機会があることによつて、農業に対する取り組み方も意識の面でだいぶ変わってきているのでしょうか。

おっしゃる通りです。農家の側にも大変大きなインパクトを与えています。たまたま立教大学にお邪魔した時に、学食で伊藤みどりさんが食べている姿を見たことがあって（笑）。あとは東京農大とかとのつながりもありますしね。有機農産物は何よりも安全性を追求した一つの象徴みたいなものですから、それを

都市の中で受け止めてくださるといのは、そこからまた都市の中にそういう波が少しずつ広がっていくことを意味するわけです。

——安全性などを高めるために、行政だけが考えて規制を設けることや政策を打つこともあると思いますが、一方で現場の方から、例えば消費者と生産者のつながりや動きの中から政策が変わっていくという例が有機農業に関してあったのでしょうか。

高島町は「たかはた食と農のまちづくり条例」を作っています。その条例で、遺伝子組み換え食品の自主規制が明記されています。これは、行政が住民運動のようなものをしつかりと受け止めて、条例を制定したということですね。

——次に、現代において、星さんがおっしゃる簡素に心豊かに生きるとは、具体的にどのような生き方を指しているのか、教えてください。教えてください。

いわゆる健康を増進するような食生活とはどういうものかを考え直すことが大事だと思います。絶えず津波のように押し寄せてくる情報とコマースリズムの渦の中で人々は暮らしているわけです。しかしそういうものに飲み込まれれば、自分の生き方としての食生活の選択に具体的に組み組みたいと思うことはなかなか難しいと思います。ですから、情報に流されないで、自分自身がどうありたいかを探求することが大事ですね。絶えず原点に立ち返る取り組みが一番必要です。非常に魅力的できらびやかな装いをした様々なものが現代のコマースリズムに入ってきます。それに飲み込まれないで、自分自身はこうありたい、こう生きたいというようなライフスタイルを自ら描くことが第一歩ですね。それがないと、絶えず巻き込まれてしまい自身自身を見失ってしまいます。そんなにも飽食・美食をしなくても、本当に安全でおいしくて栄養価がたっぷり含まれていて環境にも優しい、健康を増進するような本来の食べ物を必要な分量毎日摂取していくことで、自分の一生を通して健康で充実した生き方ができるのではないかと私は思っています。

都市に住んでいる方々も、私たちと提携活動で結ばれている方々は同じような価値観で日々生きていくわけなので、必ずしも田園の中に移住しないとそれが実現できないというわけでもありません。高島共生プロジェクトを作り、田園での暮らしを思い描きながら都市にいても同じ価値観で結ばれて生きていくという前提に立って相互交流をしています。都市においてそういうものをしつかりと受け止めてくださる方がいないと、自分たちの家族や地域の人々が生きていく生産活動だけで終わっては広がりには欠けます。都市と農村の絆をしつかりと強靱に結んでいくことが必要です。こういうものが理想であるという一つのモデルに必ずしもとらわれないで、百のつながりがあれば百の道があつていいと私は思っています。多様性こそ新しい時代の最大の特徴だと思います。

——消費者とのつながりを見つけるといのは必ずしも簡単ではないと思いますが、どのようにしたら都市と農村のつながりを見つえられると思いますか。

絶えず相互交流をしていくことが一番大事です。地域住民が都市に足を運び、都市の皆さんが農村地帯においでになり、そこで田園の豊かな文化をただ単に見たり聞いたりするだけではなくて、自分の体の中に刻み込んでいく実感を伴うことが必要です。そして田園文化社会というようなイメージを膨らませるということ です。

——農家というと、孤独な作業というイメージがありました。しかし星さんは、農民文学誌『地下水』に参加されていたり、自ら高畠町有機農業研究会を立ち上げたり、東京の学生との交流を深めたり、高畠町の地域の方々と協力して何かを進めたりと、いろいろな人との関わり合いの中で生きていくように感じます。このような人々との交流が人生に与えた影響はどのようなものでしょうか。

人と人との関わりの中で自分自身を高めることができ、日々充実感を味わいながら生きていくことができました。孤立無援だったり、希望を大きくしても近代化の中で孤独な営みであったりすると、そういう充実感が満たさ

れることは困難だと思います。ですから、希望はそんなに大きくなくとも、自分にとってこの営みが何よりも大事なものだというふうな受け止められるようなスタイルというものを、自ら作り出していくことが必要です。

これも一人ではなくて地域の仲間たち、あるいは都市の共感できる方々と一緒になって積み上げていくということでしょうね。幸いにして『地下水』という農民文学の同人の中で、真壁仁という私の人生の師匠の膝元で、ほぼ三十年間薫陶を受けてきました。物言わぬ農民であってはいけないと、岩波出版から『物言わぬ農民』という本が出版されたことがありました。かつて東北の農民は物言わぬ農民と言われてきました。どんなに痛めつけられても物を言わない、自分の本音を出さないで時代の流れに従っているということであれば、かつては満蒙開拓とか徴兵制度に引張られて、戦争の最前線で命を落としてしまふという悲劇を生み出してきました。ただ黙々として働くという実践だけではだめで、しっかりと自己表現していくことが大事であると真壁仁先生からは教えられていました。つまり物言わぬ農民に変身するということです。表

現者として自分自身を確立していくということですね。とりわけこういう情報化社会になっていくと、表現という営みが非常に大事な、大きなウェイトを占めるようになっていくと思うので、そういう意味では農民文学『地下水』で切磋琢磨してきたことは私自身大きな力になってきたなと思います。

——表現することにおいて、農業という、土を耕し生き物に向き合い生命に関わることから得られたインスピレーションや表現力は大きいのでしょうか。

大きいですね。横の広がり・ネットワークが現実の問題としてまずありますが、しかし次の世代さらには孫の世代と、世代を超えて縦軸でずっとつながっていく命の連鎖みたいなものもあります。そうでないと未来というものには展望できなくなります。

最近イノシシの被害が増えています。どんなイノシシが過密になっているのではないかと思います。あと、海水面の温度がどんどん上がっていて、これが台風や低気圧の大きな原因になっていると言われています。異常



気象というよりもそれが当たり前になってくるんじゃないですかね。これから環境的には非常にやりにくい時代になってきたなと思います。でもそれに打ちのめされてお手上げでも困ります。対策はいろいろ考えながら、イノシシと知恵比べですね。

——農業というと、一般的にビジネスとして農業するというイメージが強いと思います。しかし農業は身体的負担が大きく、生き物と向き合う仕事なので拘束時間が長いことや、都市部に出たいという人もいるので後継者不足という問題もあると思います。これからの時代に、農業の展望や農家の未来をどのように捉えていますか。

産業としての農業という側面や様相だけで捉えていくと、限りなく規模拡大しないと採算が取れないとよく言われますね。しかしそれでは、喜びとは程遠いような、むしろ孤独で苦痛のような状況に陥ってしまうので、身の丈に合った等身大のスケールで営みとして農業を続けていくということです。簡素で心豊かに生きるということの本来の意味に重なっ

てくるわけですが、産業としての農業という捉え方よりもむしろ文化としての農の営みというか、農の文化性にウェイトを置くような在り方ですね。

フランスに何回か行ったのですが、A M A P (アマップ) という家族農業を守る運動や協会があります。最初に行った時には、そういう取り組みをしているのは南フランスのごく一部の地区の三十くらいの子体しかないと言われていたのですが、今ではそのA M A P はフランス全土に広がっています。やはり等身大の家族農業をしつかり守りながら、そこで本来の農業を営んでいくという考え方ですね。例えばアメリカでも必ずしも大農経営だけではなくて、小さな農業を家族農業でやるという、もう一つの農業がC S Aですが、そういう運動も一方で展開されています。Community Supported Agriculture, いわば地産地消と日本で俗に言われているような、地域が支える農業ですね。宗教とか哲学とかを原理的にしつかり持った運動として今展開されています。ですから広大なカリフォルニアあたりのとてつもないスケールの農業と、今申し上げたような小さな家族農業があるわ

けです。どんどん人口が爆発していく時代は大規模経営を限りなく広めていけば、ほんの一握りの人しか農業をやれなくなる。ところがこういう考え方ですと、より多くの人が人間の命の根源である食べ物を生み出す農業という営みに関わることができる。そういう関わりの中で、食の大事さや環境のかけがえなさを、単なる観念論ではなく骨身に刻んでいくのだと思います。

我々はC S Aの在り方に共鳴しているわけです。例えば、健康を増進して生きるような農の営みというのはどういう営みなのかを考えた場合には、利益追求という営みとは次元の違う価値観です。地道に積み上げていくことが当然のように求められてきます。そのことに自分自身喜びを感じたり、ある程度充足するという価値観を持たないといけないですね。ですから、場合によっては宗教や哲学とつながっていても一向に構いません。私の場合は宗教も哲学もない、ただ農民の感性でもってそういう取り組みをしているというだけです。一種のグローバリズムの市場競争の中で生き残っていくためには、いわば合理主義のようなものが現代社会においては一番

価値があるというふうに思われがちで求められていますが、そういう流れで生き残っていないということはほとんどできないわけなので、たとえ自己満足だと言われようとも、自分の生き方として等身大の簡素に心豊かな在り方というものを探求していくことに尽きると思いますね。

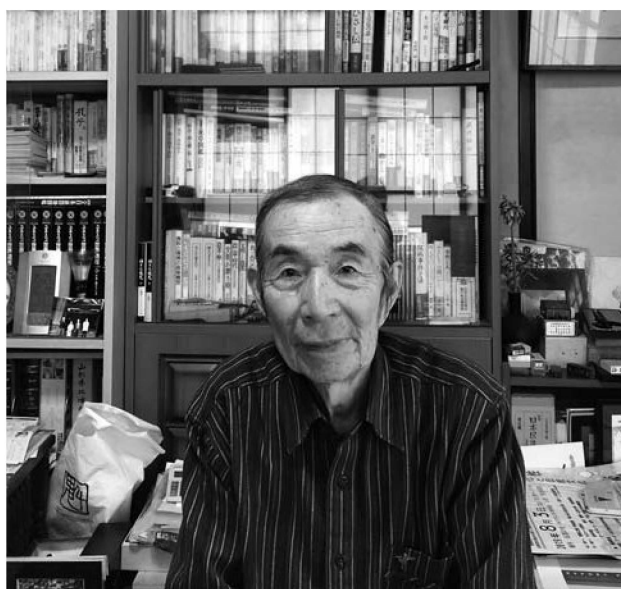
今までは経済成長を一目散に追求してきましたが、それが最先端だと思われてきました。それは全く違う物差しで脱成長という新しい波が沸き起こっていると伝えられています。残念ながら日本は脱成長という考え方はまだあまり浸透していません。お亡くなりになった西川潤先生も、そういうグローバルリズムを乗り越えて新しい時代を作るといって、最先端の理論を展開しておられました。共生という思想のようなものが一つのイズムとしてヨーロッパ諸国ではわきあがってきていることが現代の特徴でしょうね。そういうふうに思うと、そんなにあくせくしなくてもいいし、焦らなくてもいい。一日一日が大事ですから、自身の人生を突っ走らないで、ゆっくりゆっくり歩こうよという思いで生きていけばいい。今まで足跡を残すということがその人間にとつ

て非常に大事な生き方だと思われがちだったので、考えてみれば人類が地球上に誕生して何億年になるのか、そんな個人の足跡なんかすぐに消えてしまうので、そんなことに思いを致さなくてもマイペースにゆっくりゆっくり歩いていけばいいと思います。

#### 星寛治さんの詩

##### 「願望」

はてしない野道を  
ゆっくりゆっくり歩こうよ  
足跡など消えてもいいよ



星寛治（ほしかんじ）  
一九三五年九月七日生まれ。山形県高島町在住。農家のかたわら真壁仁主宰「地下水」同人としても活動。一九七三年、仲間とともに高島町有機農業研究会を発足。以後、米・りんご・ぶどうなどの有機栽培をつづけながら、詩、評論、エッセイなども発表。高島町教育委員長、東京農業大学客員教授、山形県第5次教育振興計画審議委員会委員長などを歴任。著書に『農から明日を読む』（集英社新書）、詩集『種を播く人』（世織書房）など多数。